シャッフルワールド!! 番外編集

夙多史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シャッフルワールド！！　番外編集

【Ｎコード】
Ｎ２８９２Ｕ

【作者名】
夙多史

【あらすじ】
連載作品『シャッフルワールド！！』の番外編集です。短編の気持ちで書いているので、本編に比べて描写等はやや少なめになっていると思います。時々、本編ではできないことをやりたい放題やるかもしれませんｗ　また、本番外編集の時系列は本編第二巻以降となっております。
※縦書きＰＤＦだと文字化けする可能性のある文字を使用しております。

めいどさんのいちにちっ！　朝

ＡＭ４：００
白峰家にマスターと共に居候安定中のメイドさん――レランジェの朝はここから始まる。

空はまだ淡黒いですが、清々しい空気が満ち始めています。レランジェは魔工機械人形の中でも特異な存在安定ですので、人間と同じようにその空気を肌で感じることができるのです。
なんですか？　魔工機械人形とはなにか、ですか？　これだから無知無能な人間は不安定なのです。仕方ありません。レランジェは親切者安定です。これは異界技術研究開発部に提出するレポートですが、そのことも少し触れておきましょう。
マスターとレランジェは元々暮らしていた世界が……いえ、やはり面倒ですね。本編を読め安定です。
レランジェは今、外出しています。早朝の気温は人間にとって少々肌寒いようですが、魔工機械のレランジェは大したことありません。
なぜ外にいるのか？　それは新聞配達なる『あるばいと』のためです。
「おっ！　今日も早いねぇ。そいじゃ、いつも通り頼むよ」
「了解です」
新聞屋にいた髭面の男（笑顔が気持悪いです）から大量の紙束を預かり、それを担当している地区の家々に投下することがこの『あるばいと』の仕事です。
乗り物を使用して配達をする人間もいますが、レランジェには不要安定です。自らの足で風を切って疾走し、短時間で全ての新聞を配り終えることくらいわけありません。楽な仕事です。
どうでもいいことですが、最近この地区に『メイド服を着たマネ

キン人形が車のようなスピードで早朝の路上を奔走している』という噂が広がっています。マネキン人形……魔工機械人形の仲間かもしれません。一度お会いしてみたいものですね。

ＡＭ６：００
レランジェは白峰家の厨房に立っていた。

レランジェは誘波様から定期的に頂いている『クッキングシーカー』という魔導書を片手に、この世界の料理について研究しています。

「不安定です。ガンボウの干物が添えられていません。これで朝食安定なのでしょうか？」

と言ったところで、この世界がイヴリアではないことくらいレランジェにもわかっています。食材がまるで違うので最初は不安定でしたが、異界技術研究開発部によりインプットして頂いたこの国の言語に『郷に入っては郷に従え』という言葉があります。こちらの世界での料理を早急に習得しなければ、レランジェはマスターの侍女失格です。

「マスターにもゴミ虫様にも誉めていただきましたが、まだまだ不安定です」

誘波様は魔導書のレシピ通りに作成できればゴミ虫様はイチコロ安定だと仰っておりました。しかしゴミ虫様は未だに死亡しておりません。修行が足りない証拠安定です。

本日の朝食のメニューは、ベーコン入りスクランブルエッグにオニオンスープ、スパゲティサラダとトーストなるものです。完璧だと思いたいところですが、レランジェは魔工機械ですので味見は不可能。ここはいつも通り、マスターのお口に入る前にゴミ虫様で毒味安定ですね。

ＡＭ７：００
白峰家に住む他の二人の起床時間。

ゴミ虫様家にある最も大きなベッドで金髪の少女が眠っております。この方がレランジェのマスター――リーゼロッテ・ヴァレファール様です。
「マスター、朝安定です。起きてください」
「んん～、もうちょっと……」
「了解です。では先にゴミ虫様をお起こししてきます」
「すぴー」
マスターの寝顔は愛らしさ満点安定です。マスターの睡眠はレランジェにも妨害する権利はありません。
ということで、レランジェは二階の部屋から一階のリビングに向かいます。そこには毛布を被ってソファーに横になっている惨めな少年――白峰ｒゲフンゲフン、ゴミ虫様がいました。レランジェはマスターの時と同じように優しく話かけます。
「ゴミ虫様、朝安定です。死んでください」
「――ってどだぁあッ！？　ま、またかてめえはっ！？」
「チッ。臓器の一つでも破壊したかったのですが、残念です」
「その舌打ちと恐い台詞をやめれ！　あとそこの長ドスはどこのヤクザ屋さんから盗んできたんだ！」
「魔工機械安定です」
「今関係ないよねっ！？」
ゴミ虫様は今日も元気に起床。しかし段々とレランジェの気配に対して鋭敏になっているところがいただけませんね。

ＡＭ９：００
異界技術研究開発部内にレランジェはいた。

「ふむ、ロケットパンチに通話機能か」
「彼女ならまだまだ新機能を搭載できるぞ」
「次はどうする？」
「やはり空を飛べるようにしてはどうでしょう？」
「いやいやここは音速移動を」
「投影機能もありかと」
「目からビーム」
「おっぱいミサイル」
「「「それだっ！！」」」
「君たち、あまり下品なのはやめたまえ」
「部長はオトコノロマンをわかってませんね」
「「「いやまったく」」」
馬鹿ども安定です。
失礼、白衣を纏った研究者どもがレランジェの機能拡張について検討しています。全員馬鹿面安定ですが、彼らが行う改造は今のところとても便利なものばかりです。よりマスターのお役に立つためにも、彼らは生かしておくべきでしょう。彼らは頻繁に消し炭安定にしたい視線を向けてきますが、レランジェは殴るだけで我慢できる子なのです。
「……」
数時間に渡る円卓会議が行われる中、レランジェは特にやることもありません。今日はレランジェの改造を行わないようです。ただ無言で突っ立っているだけで安定でした。

めいどさんのいちにちっ！　朝（後書き）

一人称で書くか三人称で書くか激しく迷った結果、こうなりました。

やはりレランジェ視点にするとあんまり面白くない気がします……。

（レージがいないとギャグが冴えないｏｒｚ）

めいどさんのいちにちっ！　昼

ＰＭ１２：００
異界技術研究開発部から解放されたレランジェは、ファミリーレストランにてウェイトレスの『あるばいと』を行っていた。

ここの制服はレランジェが普段から着用している侍女服に酷似しています。フリル多々なエプロンドレスです。この衣服であれば以前のようにマスターと鉢合わせても恥ずかしくありませんね。
基本的な仕事は給仕です。世界が違うとはいえ、それは侍女たるレランジェが最も得意とする分野。安定ですね。
この衣装にこの仕事……完璧です。なにも問題などありません。
「君ね。一人で数人分の仕事ができるから凄く助かってるんだけどね、客商売だからもっと表情を緩くしてくれんかね？　そんな虫ケラを見るような目ではお客様がね――」
「いえ、それは不安定です。レランジェは魔工機械ですので」
「？　君はなにを言っているんだね？」
完璧です。なにも問題などありません。
それにしても、この『テンチョー』とかいう人間に似た種族はどこの店にもいるようですね。そしてとても鬱陶しいです。しかしゴミ虫様と同等かそれ以下の下等生物とはいえ、『テンチョー』は半殺しにすると『あるばいと』を馘首される設定らしいのです。生意気なお客様を殴り倒してもクビになりましたし、このような系統の『あるばいと』は難易度が高くて不安定ですね。しかし、レランジェは二度と同じ過ちは繰り返しません。
レランジェがテキパキと『できる魔工機械人形』を衆人様に見せつけていると――
「きゃあっ！？　お、お客様、や、やめてください……」
給仕仲間の一人が悲鳴を上げました。見てみますと、人相の悪い

青年四人が彼女の周囲を取り囲んでいます。
「あん？　やめてくださいだぁ？　違えだろ？　すみませんだろ？」
「あんたがこいつの足を踏んづけたのが悪ぃんだろ？」
「痛えよ。指折れちまったよ」
「ヒャッハー！　こいつは大変だなぁ」
「そのことは、ちゃんと謝ったじゃないですか。そ、それに足を引っ掛けてきたのはお客様で……」
なるほど、どうやら下衆なお客様がレランジェの給仕仲間を貶めているようですね。いちゃもんをつけて代金を踏み倒すきなのでしょう。『テンチョー』がペコペコと謝罪しています。
あのような低俗な輩には反吐が出ますね。まだゴミ虫様の方がマシです。

しかし、レランジェには関係ありません。無視安定です。

「お待たせしました。ハンバーグステーキセット安定です」
「え？　いいの君、あっち大変なことになってるよ？」
「知りません」
絡まれている者がマスターであれば下衆どもは一瞬で縊り殺しますが、そうではないのでレランジェは淡々と仕事をこなす安定なのです。
「おいこら、なにシカトぶっこいてんだあああん？　お前も従業員なら謝罪しろやぁ！」
と、下衆の一人がレランジェの肩を強く掴んできました。
「汚らわしい手で気安くレランジェに触れないでください、下衆客様。ブチ殺しますよ？」
「あん？」
レランジェは軽く下衆客様の手をはたいて警告します。本来なら有無を言わさず排除安定ですが、ここで殴り倒してしまうとまた馘首になりかねません。

「――おふっ！？」
なので蹴り倒すことにしました。股の間を思いっ切り蹴り上げる形です。……気のせいでしょうか？　どこからか晩鐘のような音が聞こえた気がします。
「て、てめぇ！」
「ふざけてっとぶっ殺すぞ！」
「ウヒャー、兄貴完全に伸びちゃってるぜぇ」
すると、気絶した仲間を見た残りの下衆客様たちがレランジェを包囲してきました。
「あなた様は足の指はもういいのですか？」
「あんたが仲間蹴ったおかげで完治しちまったよ」
「素晴らしい回復力ですね」
と言いつつ、レランジェは足の指が折れたと虚言を吐いていた下衆客様の顎を爪先で蹴り飛ばしました。「ぶげっ！？」と弓反になった彼は窓ガラスを割って外へと放り出されます。
「てめぇえッ！？」
続いてもう一人が額に青筋を浮かべて掴みかかってきたので、その上げた足を鞭のように撓らせて踵落としをお見舞いします。「えふっ！？」と変な悲鳴を発し、白目を剥いて昏倒しました。
呆然としていた最後の一人はミドルキックで弾き飛ばし、他のお客様のテーブルの上を滑ってガシャガシャン！　と食器の割れる耳障りな音を立てます。
「不届き者どもは排除しましたし、レランジェは仕事に戻ります」
これにて一件落着安定です。
とんとん。
肩をつつかれました。
見ると、なにやら満面の笑みを咲かせた『テンチョー』が大げさな手振りで器用にジェスチャーをしています。そのままでは意味がわからないので解読安定です。

【キミ】
【クビキリ】
【Ｉ　ｗｉｌｌ　ｈａｖｅ　ｔｏ　ｌｅｔ　ｙｏｕ　ｇｏ】
……蹴り倒すこともＮＧだったようです。

ＰＭ４：３０
レランジェは白峰家に帰宅していた。

そろそろマスター（とついでにゴミ虫様）がガッコーからお戻りになられる時間です。
浴槽に湯張りもしましたし、食事の下拵えも既に完了安定です（食材はゴミ虫様が「お前に任せると碌なことにならん」と仰っていつも調達してくださっています）。
洗濯した衣類も乾燥していたので取り込みました。屋敷内のお掃除も完璧です。残るは――

「ゴミ虫様が入口の扉を開けた瞬間に魔導電磁放射砲を発射するだけですね」

「いやその理屈は間違ってるだろ」
……。
「振り返るとゴミ虫様がいました」
「なにその『振り返ると奴がいた』みたいな台詞？」
「ゴミ虫様、なぜ既に屋敷内にいらっしゃるのですか死んでください」
「語尾がおかしい語尾がっ！　なんとなく嫌な予感がしたんだよ。こりゃあ、窓から入って正解だったな」
ゴミ虫様の危機察知能力は相変わらず半端ないですね。忌々しい。

「チッ！　本日は記念日ですので盛大に逝ってもらおうと思っていたのですが」
「記念日って、リーゼの誕生日かなんかか？」
「いえ、ゴミ虫様の死亡記念日です」
「壊すぞコラッ！？」
レランジェとゴミ虫様が熱い視線をぶつけ合ってバチバチとオレンジ色の火花を散らしていると――ガチャ。入口の扉が開いて金髪紅眼の愛らしい少女――レランジェの深愛するマスターがご帰宅安定です。
レランジェはとりあえずゴミ虫様を突き飛ばします。「ごぼっ！？」と気持ち悪い声を上げて廊下を転がっていくゴミ虫様など放っておいて、レランジェはマスターに低頭します。
「お帰りなさいませ、マスター。入浴の準備は安定しております。それともお食事になされますか？　それともあちらで腹を抑えて呻いているゴミ虫様を排除安定ですか？」
レランジェはなにも変なことは言っていませんのに、なぜか「最後の選択肢おかしいだろ！」と喚いているゴミ虫様は黙殺安定です。
「う～ん、そうね。お腹減ったけど、フロが先」
「了解です。では、お背中お流しします」

めいどさんのいちにちっ！　夜

ＰＭ７：００
継続して白峰家。

レランジェは厨房で食器の後片づけをしています。
「チッ、またゴミ虫様を毒殺できませんでした」
危機察知能力に加えて危機回避能力も高いゴミ虫様です。後者の能力は『シュジンコウ補正』だと誘波様が仰っていました。レランジェにはよくわかりませんが、忌々しさ倍増ですね。
やはり殺し方に問題があるのかもしれません。次は轢殺にチャレンジ安定です。
「なんでいるんだよ！　なに寛いでんだよ！　自分家に帰れよ！」
「いいじゃないですかぁ。レイちゃんもどうせお暇なのでしょう？
内心では『うっひゃ美少女が一人増えたぜハーレムばんざーいっ！』って舞い上がっているくせに」
「舞い上がってないし自分で美少女言うなしお前は決して暇ではない！」
リビングの方が騒がしいですね。……はい？　ああ、喧騒の理由ですか？　この時間帯になるとよく誘波様が遊びに来られるのです。誘波様がいらっしゃる度にゴミ虫様が大層嫌な顔をなされるので、レランジェはとても愉快安定です。
「そんなことは置いといて、リーゼちゃん、ＴＶゲームしませんか？　巷で人気の対戦格闘ゲームを持ってきました。なんと登場キャラが全部モンスターだそうです」
「てれびげーむ？」
マスターが小動物のようにきょとりと首を傾げています。ちなみにレランジェはＴＶゲームなるものは既にインプット済み安定です。
「面白いですよぅ♪　というかレイちゃん、教えてなかったのです

か？」
「いや、リーゼにゲームができる器用さがあるとは思えなくてな」
確かにマスターはじっとしていることがお嫌いです。画面に向かってピコピコするだけというのは性に合っていないとレランジェも思います。しかしマスターを馬鹿にする発言は許容できませんね。ゴミ虫様は後で庭に埋葬安定です。
「レージ、わたしは？魔帝？で最強よ。できないことなんてないわ。面白いんでしょ？　やる！」
流石マスター、チャレンジ精神に溢れています。ゴミ虫様も見習うべきですね。
ただし――
「誘波様、マスターに挑戦したければまずはこのレランジェから倒す安定です」
「あらあら。自身ありですね、レランジェちゃん。私は現実でもゲームでも強いですよぅ」
誘波様も自信満々です。目がゴミ虫様をからかう時と同じくらい輝いています。
これは……長期戦になりそうですね。

ＰＭ９：００
ＴＶゲームは白熱していた。

「――ってなんで一勝負に二時間近くかけて終わらねえんだよ！どんだけ器用にプレイしてんだよお前ら！」
ついにゴミ虫様がなにかが切れたように怒鳴りつけてきました。うるさいですね、こちらは今いいところ安定なのです。
「誘波様のシルフ、お強いですね」
「レランジェちゃんのゴーレムも、その巨体をどうやって素早く動かしているのですか？」

クロスカウンターが決まり、お互いのＨＰバーが真っ白になって画面に『ＤＲＡＷ』の文字が浮かんできました。引き分けです。
「うー」
唸るような声に振り返ると、マスターがコクコクと頭を揺らしてウトウトしていました。どうやらもう就寝時間のようです。興が乗ってついつい時間経過を失念していました。不安定です。
見ているだけでは退屈だったのでしょうか？　マスターの瞼は三分の二ほど閉じています。
「では、レランジェはマスターをお部屋にお連れしてきます」
「あー、子供は寝る時間だもんな」
レランジェはマスターをお姫様だっこし、リビングを後にします。
「次はレイちゃんと対戦がしたいです♪」
「お前はさっさと帰れよっ！」
あのお二人には黙っていただかないと、マスターの安眠妨害です。マスターをベッドまでお連れした後で即刻排除安定ですね。

ＡＭ０：００
静寂の深夜。レランジェはマスターの部屋の前で兵隊のごとく直立していた。

魔工機械人形は眠ることができません。
マスターから供給された魔力が尽きるまで稼働安定です。
夜はマスターがお休みになられる時間。『あるばいと』はできません。マスターとマスターの住まうこの屋敷をお守りすることが今のレランジェの務めです。この仕事のことは『自宅警備員』と呼ぶそうです。
不純物と言うのであれば、現在リビングのソファーにて睡眠安定のゴミ虫様を排除するべきなのでしょう。しかし、レランジェはなにも本気でゴミ虫様を殺したいと思っているわけではありません。

冗談半分です。
ゴミ虫様に死なれてはレランジェも困ります。マスターの魔力疾患を抑制できる存在がゴミ虫様だけだからです。マルファ様もゴミ虫様同様に魔力を他から吸収できるようですが、あの方はマスターの天敵。それつまりレランジェの敵になります。
普段からゴミ虫様を目の仇にしているレランジェですが、きちんと死なない程度に加減をしています。死ななければどれだけ痛めつけようが安定でしょう？
成功率は不安定ですが……。
眠られている今であれば襲いかかればどうにかなりそうなのですが、睡眠中のゴミ虫様は獣以上の神経質さを見せます。一体どのような訓練を受ければそのような器用なことができるのでしょうか？
謎です。

……。

やはり、夜はやることがなく退屈ですね。
これがイヴリアの城であれば仕事など山ほどあるのですが……この屋敷は狭くて不安定、仕事などあっという間に終わってしまいます。
退屈。
マスターが口癖のように仰られている言葉です。
この世界に来て、その言葉に込められた感情をレランジェは身に沁みさせることができました。つまり、マスターの気持ちの一片をレランジェは理解することができたということです。
喜ばしいことです。ですが、マスターが嫌っている通り、退屈というものはあまりよろしくない状況ですね。
なにか、この状況を打破できる策があれば安定なのですが……
…明日、異界技術研究開発部に相談してみましょう。
とりあえず、本日は誘波様もいらっしゃられたことですし、もう

一度屋敷内の清掃をしておくことにします。
掃除機という機械は駆動音が大きいので使用できませんね。モップがけ安定です。
レランジェは一階の廊下をスイスイと掃除していきます。続いてそっとリビングに入り、寝ているゴミ虫様を確認してモップで脳天をかち割……もとい静かに床を空拭きします。
「今なんか心の中で訂正された感じがしたんだがしっかり俺を攻撃してたぞ！」
暗い室内に立つゴミ虫様が荒い息づかいをしていました。
「おはようございます、ゴミ虫様」
「やかましいわ！　まだ零時過ぎじゃねえか！」
「大声を出すとマスターの安眠妨害です」
レランジェは口の前で人差し指を立てて「しー」と息を吐きます。これはこの世界で使われる『黙れ殺すぞ』という意味のジェスチャーです。
「お前のせいだろうが――って、なんだ？　今頃掃除してんのか？」
レランジェの持っているモップにゴミ虫様が気づきました。
「はい。誘波様が散らかした後を片づけていませんでしたので」
言うと、ゴミ虫様は少し神妙な表情をされました。それから右手をレランジェに差し出してきます。
「モップ貸せ。手伝うから」
「いえ、これはレランジェの仕事安定です。ゴミ虫様はそこで惰眠を貪っていればいいのです」
「嫌な言い方だな……。つーか、ここは俺の家なんだ。最近任せっぱなしだったから説得力ないかもしれんが、俺が管理しないでどうする。いいから貸せよ」
ゴミ虫様は強引にレランジェからモップを引っ手繰ると、部屋の照明をつけて掃除を始めました。
「お前はその辺に落ちてるお菓子の袋とかを片づけてくれ」
先程の夜襲はなかったことにしたらしいゴミ虫様がレランジェに

指示してきます。
……これだからゴミ虫様は困るのです。頼んでもいないのに勝手にレランジェの仕事を奪うなど、何様のつもりなのでしょう。まあ、ゴミ虫様ですが。
毎日酷いことをしているレランジェに対しても時々見せるこの優しさ――彼は聖人かなにかなのでしょうか？　理解できません。不安定です。
ですが、悪い気分ではありませんね。
「了解です」
レランジェは今、少しだけ微笑んだような気が自分でもしました。

めいどさんのいちにちっ！　夜（後書き）

めいどさんのいちにちっ！完結です。
よく考えたらマスターとの絡みがほとんどない。大体のところをカットしてますね。まあいいか。

それゆけ！　異世界研究部！

「説明しよう！　異世界研究部とはこのオレ――桜居謙斗が創設した文字通りの未知なる世界を探求するオレ得でオレ得でオレ得な部活である！　略して異界研！　ん？　非公認じゃないかって？　だからどうした。部費なぞいらん。元よりオレはポケットマネーのみで活動していたからな」

オレはふさっと前髪を手で払う。決まった。いや、ちょっとキザっぽ過ぎたか？　でもこの癖毛はオレのチャームポイントだからちゃんとアピールしないとな。たまに馬鹿にしてくる白峰はこの絶妙な癖っ毛加減の素晴らしさが全然わかってないんだよ。

「部長、なに得意げなキメ顔をした自分をビデオカメラで撮ってるんですか？」

「それよりも部長、こんな時間に集合かけるなんて一体どんな活動をするんですか？」

「カァァァット！！　部員A＆部員B！　勝手に雑音を入れるんじゃない！」

オレはそこで真っ白な視線を向けてくる部員たちを怒鳴った。二十一時を回った夜中だが、大声を出したところで近所迷惑にはならない。なぜならここは街郊外の自然公園だからだ。迷惑をかける相手がいないんだよ。

「いいかよく聞け部員A＆B」

「略称が酷くないですか？」

「名前で呼んでくださいよ」

「黙らっしゃい！」

己らの名前なんて覚えてなどいない。異世界人ならともかく、なんの変哲もない地球人の野郎の名前を二人も記録するほどオレは脳内データベースを無駄活用したくないんだ。もしオレが自分の人生を漫画で表現するとしたら、こいつらの容姿なんてモブキャラ以下

になるだろうね。肉つきのいい棒人間って感じに。
「なんや知らへんけど、今度の学園祭に向けて短編映画を撮るんやて」
怪しい関西弁でそう言ったのは、我らが異界研の紅一点にして副部長――稲葉レトちゃんだ。ボーイッシュな短髪は紫がかった黒髪で、好奇心旺盛そうな瞳は宝石のような赤紫色をしている。服装は上下ともに動き易い赤のジャージで色気はイマイチだが、彼女が『美少女』のカテゴリーに属することは誰が見ても明らかだろう。
レトちゃんは白峰と同じで異世界人の血が半分流れているんだ。つまりハーフ。しかも戦闘能力のあるレトちゃんは、高等部に進学する少し前に正式な異界監査官として認められてるんだ。おっと、なんで異界研に入部したのかと聞くのは野暮ってもんだ。そんなの異世界に興味があるからに決まっているだろう？　ちなみに微妙な関西弁を喋るのは関西出身の母方の祖母が原因らしい。
「そうだったんですか、稲葉さん！」
「それならそうと部長も言ってくれればいいのに」
レトちゃんに声をかけられて感激したように目を輝かせる部員AとB。この野郎どもはレトちゃんが目的で異界研に入ったようなもんなんだよな。あ、雑用を任せるために入部を許可したことは秘密にしてくれよ。
「ほんで桜居先輩、ウチらはどないな映画撮るんや？」
「フフフ、言うまでもないだろう、レトちゃん。無論、『次元の門（プレナーゲート）』の観察映像だ」
「それ、映画なん……？」
「もしも異獣とか異世界人が現れた時、映画と言っといた方がレトちゃん的にも都合がいいだろう？」
「おお、流石やな桜居先輩！　でも本来ならウチはそれ自体を止めなあかん立場やねんけど」
「細かいことは気にしない！　あと、今は『部長』と呼びたまえ」
「せやったな、桜居部長」

ケラケラと無邪気に笑うレトちゃん。オレとレトちゃんが楽しげに会話してるもんだからか、部員ＡＢから殺意と羨望の混じった視線を感じる。気にしないけどね。
「ところで部長、なんで今日のこの時間にこの場所で門が開くってわかったんや？　監査局もまだ把握してへんことやのに」
きょとり、とレトちゃんは可愛らしく小首を傾げる。流石は異界研の副部長。オレが訊いてほしい質問をわかってらっしゃる。そこでオレたちの会話についていけてない地球人のボンクラどもとは格が違うな。
「それはな、オレが独自に開発した『次元の門』感知システムのおかげなのさ」
「ほえぇ、部長が個人で監査局より高性能なシステム作ったとか信じられへんわ」
「そのシステムとはずばり、これだ！」
オレは鉤状に曲がった銀色の針金を一本ずつ両手に握ってみせた。
「そうそう、これ一組あったら金銀財宝ざっくざく――ってそれダウジングやんかぁ！」
バチン！　楽しげにノリツッコミをしてくれたレトちゃんに背中をしばかれた。
「痛いよ！　普通に背中痛いよ！　そしてこれボケじゃないから！　こう見えて割と正確なんだぞレトちゃん。今だってこう、ビビビ！　って感じにオレに門の出現方向を教えてくれてるし」
「部長、今さらやけど変な電波でも受信しとるんとちゃうん？　ホントに埋蔵金とか温泉とか掘り当てるオチやったらウチも大歓迎やけど」
レトちゃんのあの目はオレを信じてない目だ。くそう、こうなったら意地でも『次元の門』の出現場所を特定してやる！
「部長、映画じゃなくて宝探しになったんですか？」
「この辺に徳川の埋蔵金が埋まってるなんて聞いたことないですけど」

「いいからＡＢはカメラと照明を持ってついてこい！」
「「ついに『部員』とすら呼んでもらえなくなった！？」」
なんか野郎どもがショックを受けてるみたいだが、知ったこっちゃない。
「でもまあ、これはこれで冒険みたいで面白そうやな」
やる気になったらしいレトちゃんもニヤリと笑い、ＡＢと共に昔のＲＰＧみたくオレを先頭に縦一列に並んで歩き始めた。

――三十分経過――

「嘘や……」
レトちゃんがポカンとしている。それもそうだろう、自然公園のきっちり整備された歩道を歩き回って幾年月（三十分）、ようやく目的のブツを見つけたのだから。
埋蔵金をな！
おっと、『オレにとっての』をつけ忘れた。つまるところは『次元の門』ってわけですよ！　レトちゃんにしか見えてないけど、彼女の反応からして目の前にあることは間違いない。
「いよっしゃぁあああ！　早速ダイブだぁあああ！」
「あかんて！　流石にそれはウチも止めるわ！」
門があると思われる場所に突っ込みそうになったオレは、危ういところでレトちゃんに引っ張り戻された。いかんいかん、嬉しさのあまり一瞬我を忘れていた。今日はあくまで撮影だったな。
頼むから、なにも出てこないなんてつまらない展開にだけはならないでくれよ。
「あ、はい。せやから、ウチがなんとかしますんで……」
オレがこないだ新調したハイビジョン対応ＣＭＯＳ１／４型のビデオカメラで門を凝視している間に、レトちゃんの携帯に異界監査局から連絡があったみたいだ。普段なら門出現前にはとっくに観測されていて、最も近い位置にいる監査官へと指示が飛ぶ仕組みにな

っているらしいのだが、ここはどうも電波が悪くて通達が遅れてしまったようだ。
白峰から聞いたところによると、『次元の門』の出現平均時間は約十分だとか。それまでになにか異世界絡みのアクシデントとか起きないかなぁ。後ろで照明を支えている部員二人は欠伸なんかして暇そうだ。
気持ちはわからんでもない。オレだってただじっとしてるのは性に合わん。いっそのこと異世界に飛び込もうか。……いや、今度やったらレトちゃんに本気で気絶させられそうだから自重しよう。
仕方ないから白峰に電話かけてやるか。あいつも入院生活で退屈してるだろうしな。
Ｐｒｒｒｒ！　Ｐｒｒｒｒ！　Ｐｒｒｒｒ！　ガチャ。
「やあ、白峰、元気か？」
『入院生活してる人間に言う言葉じゃないよな。それと院内は携帯禁止だ。俺がたまたま屋上にいたからいいものを』
電話の向こうから激しくウザったそうな声が返ってきた。こいつは白峰零児。オレの中学以来の悪友だ。そしてリーゼちゃんといいレランジェさんといいセレスさんといい誘波さんといい、異世界人の美少女に囲まれてウハウハしているオレの――否、世界の敵！
うん、そう考えただけで殺意的な波動に目覚めそうだ。
「白峰、ちょっと屋上から飛び降りてみようか」
『え？　なんでいきなり俺に自殺を薦めてんのお前？』
チッ。やっぱダメか。
『心の舌打ちが聞こえたぞ桜居』
「まさか、親友に向かって舌打ちなんてするわけないじゃないか」
舌打ちに関しては地獄耳を通り越している白峰だった。
『んで、こんな時間になんの用だよ。俺、そろそろ病室に戻らねえといけないんだけど？』
「ああ、実は今オレ、自然公園にいるんだが――」
「自然公園って郊外のアレか？　なんでまたそんなところに？」

「――『次元の門』が目の前にあるんだけど飛び込んでもいいかな？」

『よーしそこで待ってろすぐ行くから！　いいか、絶対早まったマネすんじゃねえぞ！』

プツッ。ツーツー。

さてさて、我らが白峰くんが監査局の医療機関を無事に抜け出せるかどうか見物だ。入院生活ってもんは本気で退屈だからな。これくらいの刺激があってもいいと思う。オレ、入院したことないけど。

まあ、丁度いい暇潰しになったよ。

「ぶ、部長！」

「なんですかアレは！」

部員たちが慌てているな。でもオレの心は高揚している。動悸が収まるどころか早鐘になっていく。

目の前の空間が、水に石を投げ込んだみたいに強く波打ったんだ。

こうなると一般人のオレや部員だって門の見分けがつく。それだけ波紋の広がり方が激しいってことは、異世界のなにかがこちらの世界へ来る予兆に他ならない！

「キタァアアアアアアアアアアアアッ！！」

オレは感極まって叫喚していた。そして魚が水面で跳ねるようにそれが門から飛び出してきたのと、部員たちが情けない悲鳴を上げて逃走したのはほぼ同時だった。

部員たちなど勝手に逃げていればいい。オレはここぞとばかりに脳内データベースに接続し、来訪者の一瞬一瞬の姿をビデオカメラと共に焼きつける。

ギョロリとしたまん丸の目玉！

平たい円盤型の体！

上下に突き出したヒレみたいなもの！

空中を魚のごとく泳ぐその姿！

……はて？
このマンボウに似た生物、どっかで見た記憶が……？
「あーっ！　確かリーゼちゃんの世界で見たやつとそっくり！」
しかもあの時のマンボウよりも二回りほどでかい。明らかにボス級モンスターだ。――ん？　ちょっと待てよ。てことはこの『次元の門』はリーゼちゃんの世界に繋がってるのか？
「桜居先輩！」
ぐいっとレトちゃんに腕を引っ張られた。瞬間、さっきまでオレがいた場所をオレンジ色の劫火が焼き尽くした。
「だぁあああああオレの『次元の門』感知システムと照明器具がぁあああああっ！？」
そこに置きっぱなしにしていたそれらが炎の中でドロドロになっていく。感知システムはぶっちゃけただの針金だけど照明器具は高かったんだぞ！
マンボウの化け物の目がギョロリとオレたちを捉える。そしてその牙の並んだ口がオレンジ色に光ったかと思えば、凄まじい火炎流を吐き出した。またもレトちゃんに引っ張られて火炎を避ける。カメラだけは、このカメラだけは絶対に放してなるものか！
「ダンボウゥ～」
なにその鳴き声！？　温め過ぎ！
「よし、あいつの名前は仮に『ダンボウ』としよう」
「なに暢気なこと言ってるんや先輩！　アレはどう考えても異獣やで！　危ないから安全なとこまで離れとき」
「いや、離れるならレトちゃんも一緒だ。もうちょっと待てば白峰が来るから」
「そんなん待っとったら門が閉じてまうやろ。あと先輩、ウチも監査官ってこと忘れてへんか？」
ニッとレトちゃんの唇が笑みの形に歪む。忘れてたわけじゃないけど、女の子に戦わせるのはなぁって思ってたんだよ。
「残念やけど、白峰先輩の出番なんてないで」

パシン！

自分の掌に景気よく拳を打ちつけたレトちゃんが異獣――ダンボウの前に出る。ダンボウもレトちゃんが戦意を見せたからか、警戒するように空中で静止する。

数秒の睨み合い。

先に動いたのはダンボウの方だった。

灼熱の火炎放射をレトちゃんは横に飛んでかわすと、そのまま地面を強く蹴って一鼓動のうちにダンボウへと肉薄する。

「赤雷装纏（せきらいそうてん）――」

バチチィ！　と激しいスパーク音を響かせ、レトちゃんの全身に赤色の光が宿った。バチリバチリと弾けるそれは、彼女が自らの魔力を変換して纏った電気。

レトちゃん――稲葉レトは帯電能力者なんだ。本人曰く、電気ウナギみたいな人種だとか。

「――臥龍天衝（がりょうてんしょう）！」

ダンボウの真下に潜り込んだ赤雷纏うレトちゃんが、掌底で突き上げるようにしてヒレの付け根辺りを打った。瞬間、ダンボウは打ち上げ花火よろしく凄まじい勢いで夜天に昇る。

「青雷装纏（せいらいそうてん）――」

天を仰ぐレトちゃんの纏っていた電気が赤から青に変化する。そうして力を溜めるように一度腰を屈めると――フッ。レトちゃんの姿が消えた。

彼女の能力を異界研部長として一応知っているオレは、すぐさま上空を見上げる。レトちゃんは先に打ち上げられていたダンボウのすぐ傍まで迫っていた。

彼女の能力はただ帯電するだけじゃない。帯びた電気に攻撃力があることはもちろん、その色によって様々なボーナスが自分自身に付加されるんだ。赤なら腕力アップ、青なら跳躍力アップってな感じに。

「――空月崩牙（くうげつほうが）！」

ついにダンボウを追い抜いたレトちゃんは、オーバーヘッドキックの要領でその巨体を叩き落とした。さらにあろうことか空中を蹴って自分も上昇から下降に運動を切り替える。
落下中にもう一度蹴りを入れられ、超加速したダンボウは隕石のごとく地面に叩きつけられた。……気のせいか、オレにはダンボウさんが涙を流していたように見えた。
だが、ダンボウさんも伊達にボス級の体格をしているわけじゃない。落下地点からすぐに浮遊し、未だ空中にいるレトちゃんに向けて火炎を吐いた。
迫る炎に対し、青い電気を纏ったレトちゃんはまたもそこに見えない壁でもあるかのように大気を蹴って避ける。空中をジグザグに移動しながらストンと着地したレトちゃんは、スポーツを楽しんでいるような爽やかな笑顔だった。
「これでしまいや。紫雷装纏（しらいそうてん）――」
レトちゃんの纏う電気が青から紫に変色する。それがレトちゃんの右掌に収束したかと思えば、長大な槍の形に固定された。
「――紫電滅槍（しでんめっそう）！」
野球のピッチャーよろしく大きく振り被り、槍を投擲するレトちゃん。雷速で飛来する紫電の槍をかわすことなどできず、貫かれたダンボウは吹き飛んで空間の歪みに消えていった。『次元の門』の向こう側にある世界へ戻ったんだ。
「あちゃー、ちょいやり過ぎてもうたかなぁ。まあ手加減したし、頑丈そうやったからあのくらいじゃ死なんやろうけど」
苦笑して頭を掻くレトちゃん。彼女の能力は知っていたオレだけど、実際に戦ってるところは見たことなかったんだよね。なんというかそのう……感動したぜ。
オレはビデオカメラでしっかり、というかちゃっかり撮影できていることを確認してレトちゃんに歩み寄る。
「レトちゃんって実は白峰より強いとか？」
「いやいや、白峰先輩には敵わへんて。ウチはまだまだ勉強中の身

や。最後の技も白峰先輩の能力を参考にして思いついたもんやし」
「あの厨二臭い技名は？」
「え？　かっこええやん」
むむ、否定できん。
「ところで先輩、あ、いや部長、『次元の門』閉じたけどまだ撮影続けるん？」
無邪気に訊ねてくるレトちゃんは、『続ける』と言えば一晩中だって付き合ってくれるだろう。
オレは、ふむ、と唸った。
「門が閉じたのならもうここにいる必要はないな。無駄な時間を使わないのがオレの趣味だ。早く帰って映像の編集もやりたいし」
「あははは、異界研の活動自体が世間一般では無駄なんやろうけど」
失敬な！
手分けして部員二人がいなくなった分の荷物を持ち、オレとレトちゃんは帰路についた。その途中、オレはふと疑問に思ったことを口にした。
「今さらだけど、レトちゃんはどうして監査官になったんだ？」
帯電能力のことや異界研に入部した理由については真っ先に訊いていたけれど、監査局絡みの話はなにも聞いてないんだよね。あまり一般生徒がいる前でぶっちゃけていい話でもないし。そういうところはオレだって『知った者』として分を弁えてるんだよ。
「ウチな、昔は自分の異能が嫌いやったんや」
レトちゃんは昔を懐かしむように星空を見上げた。
「自分の中に異世界人の血が流れとることは別にどうでもよかったんやけど、この力だけはなぁって。白峰先輩みたいに完全に自分の意志が関わらないと使えへん能力でもないし、無意識で発動して友達を傷つけたら嫌やろ」
「じゃあ、力を制御できるようになるために監査官にってこと？」
「ちゃうちゃう、そんなんやない」
レトちゃんは笑いながら否定した。

「ウチが監査官になったんは憧れや。中二の頃に一度だけ監査官の人に助けられたことがあってな。ウチもその人みたいに自分の能力と向き合い、共に生きられるかっこいい人になりたかったんや。ほんで能力使うて人助けやってみて、たまたま助けた人が異世界人やって、怖がられることなくお礼まで言われて、それがまた気持ちよくって、気づいたらあの人と同じ監査官になっとった」

彼女は自分の目的のために異界監査官になったわけではないらしい。白峰や迫間や四条みたいな特殊な存在だと言える。日本本局ってそういうやつら多いなぁ。

「時にその人って男？」

「んや、ウチとそう歳の変わらへん女の子やったけど……にひひ、部長、まさか嫉妬しとるん？　ウチは女の子相手でも全然オーケーやで」

くふふ、とレトちゃんは嫌らしい笑みを浮かべている。嫉妬？　冗談じゃない。嫉妬なら常にしている。どこぞのハーレム野郎にね。あ、そういえば白峰の野郎はどうなったんだろう？　……どうでもいいか。

「部長をからかうもんじゃないぞ。やろうと思えばビデオを編集してレトちゃんだけを水着にすることだって可能なのだ！」

「それおもろいなぁ！　他にはどんなことできるんや先輩？」

あれ？　予想外の反応。

「フッフッフ、だったら今夜は部室でオレの編集テクをとくと見ていくがいいさ！」

一度帰宅するという選択肢もあったけど、オレとレトちゃんはその足で学園にある部室へと向かうのだった。署名だけを集めて公式認定させた映画研究部という仮の名をした部室に――。

その頃、異界監査局の医療施設。

「だからあのアホが門の近くにいて大変なんだって！　俺が行くし

かねえんだよ！」
「ダメよ。怪我人は一歩も院内から出さないわ。大人しく病室で寝てなさい」
「うわっ！？　なんでただの看護婦に残像ができるほどの素早い動きがぎゃあああああああっ！？」
施設を抜け出そうとしていた白峰零児は、なんかやたらと強いナースさんに捕まって病室のベッドに三日間ほど縛りつけられていたとか。

それゆけ！　異世界研究部！（後書き）

二巻後、三巻前のレージが入院している間にあったお話です。
無意味に技名とか叫んでますけど、そういうの嫌いな人がいたらすみません；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2892u/

シャッフルワールド!! 番外編集

2011年8月21日03時26分発行